

# Acanthus

headline news

## 8学部から3学域16学類への 再編構想の背景と経緯

理事(教育担当)・副学長 鹿野 勝彦

夢project 中村慎一助教授、濱田青陵賞受賞

Campus Trend 新入生はノートパソコン必携!

産学連携 自然科学研究科とコマツが産学連携協定

医療最前線 高度で先進的な医療を提供する新中央診療棟

地域と歩む 医師不足の能登地区を支援する「地域医療学講座」

海外からの報告 フィンランド人気質

Dou!Sou!Kai!便り 薬学同窓会

歴史探訪 石川県専門学校

ニュース&トピックス

2008年度から現在の8学部を3学域16学類に再編・統合する「3学域構想」が12月9日、発表された。構想のねらいは――。

# 金沢大学から新しい風を

## ――8学部から3学域16学類への

## 再編構想の背景と経緯――

理事(教育担当)・副学長 鹿野 勝彦



3学域構想について記者発表する林勇二郎学長(中央)、大村明雄理事(左)、鹿野理事(右)

### 近

年、大学が取り組むべき教育・研究の領域そのものや、これらに対する要請が大きく変化し、他方では18歳人口の急速な減少が進むなかで、個々の大学はこれまで以上に厳しい競争の下に置かれるようになってきた。

その中で金沢大学の将来像は、どのようなものであるべきなのか。地域に根ざすとともに、世界に向けて高い水準の研究成果と人材を送り出す、「教育を重視した研究大学」という理念を具体化してゆかためには、どのような形に大学を造りかえてゆくのか。法人化に先んじて2001年から始まったその検討の結果が、今回公表された学域再編構想である。

### 目的と構成

これまで、大学における学士レベルの学生募集と教育は、一般にその学科・講座を基本単位としてきた。歴史と伝統をもつこのような組織・制度は、個々の学問分野を守り、後継者を育ててゆく上で重要な役割を果たしてきたが、反面、ややもすると、社会的要請の高い新領域での研究教育に、積極的に取り組むことを妨げる要因ともなってきた。

また、その単位が細分化されてゆく過程で、大学へ入学しようとする受験生がどこを志願すれば本当に自分が学びたい分野を学べるのか、正確にイメージすることが次第に困難にもなってきた。

金沢大学の再編構想では、学部・学科を廃し、学類という新しい学生受入れの組織を設けるとともに、教員組織を学生組織と分離することで、幅広い内容と柔軟な制度をもつ教育体制を築こうとしている。

学域・学類の具体的な構成は図のとおりである。このうち、現行の文・法・経済・教育の4学部を統合した人間社会学域及び理・工の2学部を統合した理工学域は、それぞれ6つの学類からなるが、これらの学類は学生募集の基本的な単位であり、従来の学科等別の学生募集に比べると、募集単位の数は半分になっている。つまり、これまでより大きな単位に

## 教育組織（学域・学類・コース）

※数字は入学定員（コース名称は一部検討中）

### 〈現行〉学部・学科

<b>文学部</b>	(170)
人間学科	55
史学科	50
文学科	65

<b>法学部</b>	(180)
法政学科	180

<b>経済学部</b>	(205)
経済学科	205

<b>教育学部</b>	(195)
学校教育教員養成課程	80
障害児教育教員養成課程	20
人間環境課程	60
スポーツ科学課程	35

<b>理学部</b>	(170)
数学科	24
物理学科	32
化学科	37
生物学科	23
地球学科	26
計算科学科	28

<b>工学部</b>	(419)
土木建設工学科	77
機能機械工学科	72
物質化学工学科	90
電気電子システム工学科	47
人間・機械工学科	72
情報システム工学科	61

<b>医学部</b>	(295)
医学科（6年制）	95
保健学科 コース別募集	200

<b>薬学部</b> 一括募集	(75)
薬学科（6年制）	35
創薬科学科	40

※2006年度改組予定

合計 1709 （入学定員は変化なし）

### 〈改組後〉学域・学類・コース

<b>人間社会学域</b>	(750)
<b>人文学類</b>	145
心理学コース、人間科学コース、フィールド文化学コース、歴史文化学コース、言語文化学コース	
<b>法学類</b>	170
公共法政策コース、企業法コース、総合法学コース	
<b>経済学類</b>	185
経済理論 経済政策コース、経営・情報コース、比較社会経済コース	
<b>学校教育学類（教員養成課程）</b>	100
教育科学コース、教科教育学コース	
<b>地域創造学類</b>	80
福祉マネジメントコース、環境共生コース、まちづくりコース、健康スポーツコース	
<b>国際学類</b>	70
国際社会コース、日本・日本語教育コース、アジアコース、米英コース、ヨーロッパコース	

<b>理工学域</b>	(589)
<b>数物科学類</b>	84
数学コース、物理学コース、計算科学コース	
<b>物質化学類</b>	81
化学コース、応用化学コース	
<b>機械工学類</b>	140
機械システムコース、知能機械コース、人間機械コース、エネルギー環境コース	
<b>電子情報学類</b>	108
電気電子コース、情報システムコース、生命情報コース	
<b>環境デザイン学類</b>	74
土木建設コース、環境・防災コース、都市デザインコース	
<b>自然システム学類</b>	102
生物学コース、バイオ工学コース、物質循環工学コース、地球学コース	

<b>医薬保健学域</b>	(370)
<b>医学類（6年制）</b>	95
<b>薬学類（6年制）</b>	35
創薬科学類	40
保健学類 コース別募集	200
看護学コース、放射線技術科学コース、検査技術科学コース、理学療法学コース、作業療法学コース	

合計 1709

入学した学生は、入学後、共通教育や専門基礎教育を受けた後、一定の時期に自分が専攻する分野（コース）を決めることになる。

この両学域においては、人間社会学域の地域創造学類、国際学類や、理工学域の自然システム学類、バイオ工学コースのように、これまでの金沢大学では組織的な教育研究が行われていなかった領域を対象とする単位がいくつか立ち上げられていることにも注目していただきたい。

また、各学域・学類においては、領域ごとの共通科目で編成されるコア・カリキュラム、自分が所属する学類・コース以外の科目も系統的に学べる複数専攻制ないし副専攻制、就職や資格・免許取得につながるキャリア形成プログラムなどが整備される。

また、現在の医・薬の2学部を統合した医薬保健学域は、4つの学類からなる。ここはもともと教育研究の単位が、資格・免許の取得と直結しているため、学生募

集の単位や入学後の進路選択のあり方を変更することは困難だが、職種に関わらず医療人を育成するための全人教育を強化するための、専門基礎教育の強化が新制度の下で図られる。

**今後の課題**

**実** はこいつった制度改革を先取りする形で、教育の現場では、すでに一定の変化が進んでいる。文・法・経済学部で2004年度入学生から導入され

た学部間での副専攻制や、2006年度の共通教育刷新はその例である。だが学域・学類制に向けてのカリキュラム、入試の改革や、新しい制度の円滑な実施を可能とする教職員の組織・運営のあり方など、検討すべき課題はなお多い。

しかし、この改革は金沢大学のみならず、国立大学の教育研究のあり方を大きく前進させる契機となる可能性も秘めている。「新風文化の扉」が、今、金沢で開かれつつある。



角間キャンパスには7学部がある。手前 北地区：人間社会学域に再編される文・法・経済・教育の各学部／真中 中地区：理工学域に再編される理学部／奥 南地区：理工学域に再編される工学部と医薬保健学域に再編される薬学部／医学部は宝町・鶴間キャンパスにある。

# 「玉の王権」論に、紀元前数千年の 浪漫を追い、濱田青陵賞を受賞！

日本考古学の先駆者的な存在として知られる濱田耕作（号／青陵）博士の名を冠した賞が、博士にゆかりのある岸和田市と朝日新聞社によって創設されたのは、博士の没後50年にあたる1988年のこと。以来毎年、考古学とその周辺諸科学の分野で活躍中の研究者に贈られている。

昨年の第18回濱田青陵賞は、「アジア稲作の起源と展開・中国文明の成立をめぐる比較研究」が認められ、本学文学部の中村慎一助教授が受賞。受賞理由ともなった「玉の王権」論の一端に触れるとともに、中国考古学に馳せる熱い思いを取材した。



文学部助教授 博士(文学)  
**中村 慎一**

プロフィール／1957年東京生まれ。東京大学文学部卒業。北京大学考古学系留学の後、東京大学大学院人文科学研究科にて博士課程単位取得。奈良国立文化財研究所を経て現職。

上にあった。取材ひとつ受けるにあたっても、論理的な組み立てを事前に行っていることをうかがわせ、そんな素質も考古学には必要なのかと思わせられる。

昨年9月に催された授賞式および受賞記念講演やシンポジウムをまとめた小冊子もあり、その中には「夏は本当に中国最古の国家なのだろうか、また、二里頭は中国最古の都市なのだろうか。それ以前

中国最古の国家は、  
本当に「夏」なのだろうか…。

中村慎一助教授を研究室に訪ねると、濱田青陵賞の表彰状と記念の楯はもてるん数冊の参考文献が、あらかじめ机

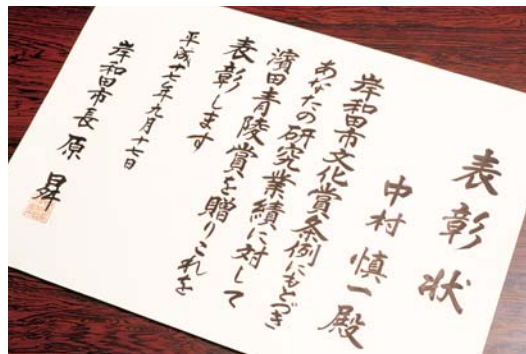
に中国の大地に国家と都市は存在していなかったのだろうか。この問題について考えてみることにしよう。「と

記念講演要旨がある。

助教授にとって、内容的にはいつものように自論を熱く展開する記念講演ではあったのだが、いつもと違うことが一つあった。妻と二人の息子もまた会場において講演に耳を傾けているのである。

「家族の前で講演するのは、ほんと初めての経験だったのですが、お父さんが研究していることが少し分かったような気がする、と息子たちがちょっとばかり私を見直してくれたのが嬉しかったですね」。

やさしく子煩悩な父親の笑顔を見せる。



## いわゆる考古少年では なかったけれど…。

奈良国立文化財研究所から金沢大学へと移ってきたのは1993年のこと。子煩悩な父親としては、息子たちと一緒にになって冬はスキーを夏は昆虫採集を楽しんだり、金沢の自然の豊かさを満喫していると言っ。

考古学の道に入る研究者の中には、土器の破片を拾ったり遺輪を見つけたりといった子供時代の遊び体験を持つ、いわゆる「考古少年」が少なくない。助教教授の育ったのは土器の破片が落ちているような環境ではなかったが、思い返せばすでに中学時代に古代史や考古学、民族学といった新書を読んでいたと言ひ、その当時の新書がまだ手元に残っていたりする。

大学進学にあたって、裁判所に勤めていたご両親からは当然のごとく法学部を薦められたのだが、それを曲げて文学部を選択し国史学へ、そして中国考古学をフィールドに数千年の時をさかのぼり「玉の王権」論を世界に発信…。そんな学びのルーツは中学時代にあったようだ。

倭人の存在に出会い、日本人のルーツへと好奇心をひるがたとき、その答えが日本列島だけで完結するはずもなく、大陸を志向し北京大学考古学系留

学へとつながったのは必然なのだろう。

## 長い時の流れを扱い 感動に満ちあふれた学問…。

中国新石器文化の研究、アジア稲作の起源と展開に関する研究、政治組織の進化に関する比較考古学的研究。助教教授の研究分野は大きくこの3つに分けられる。

此処から導かれた「玉の王権」論は、日本、中国で広く論じられているのももちろん、昨年の秋にはフランスの著名な歴史学専門誌にも寄稿論文が掲載され、遠くヨーロッパでも注目を集めている。

紀元前6千年の黄河流域での雑穀栽培

培、そして長江流域での稲作栽培の始まりが、社会を複雑化させるとともに文化を育み、やがては都市の創造へとつながって行く。文字のない先史時代のことであり、遺跡からの埋葬品や発掘物からその時代を想像するしかないのだが、発掘されたモノだけを研究対象にしても見えてくるものは限られる。

世界各地に受け継がれている文化をも考え合わせることで、数千年前の真実を浮かび上がらせるのが、比較考古学という分野であり、助教教授が本領を發揮するステージなのだ。

玉（軟玉 日本でいうヒスイは硬玉）で作られた副葬品の研究から導き出されたのが、これらの玉器を権力の象徴とした「玉の王権」の存在。副葬品や埋蔵品の発掘に関わり、その数千年という時を超えて出会うモノとの一期

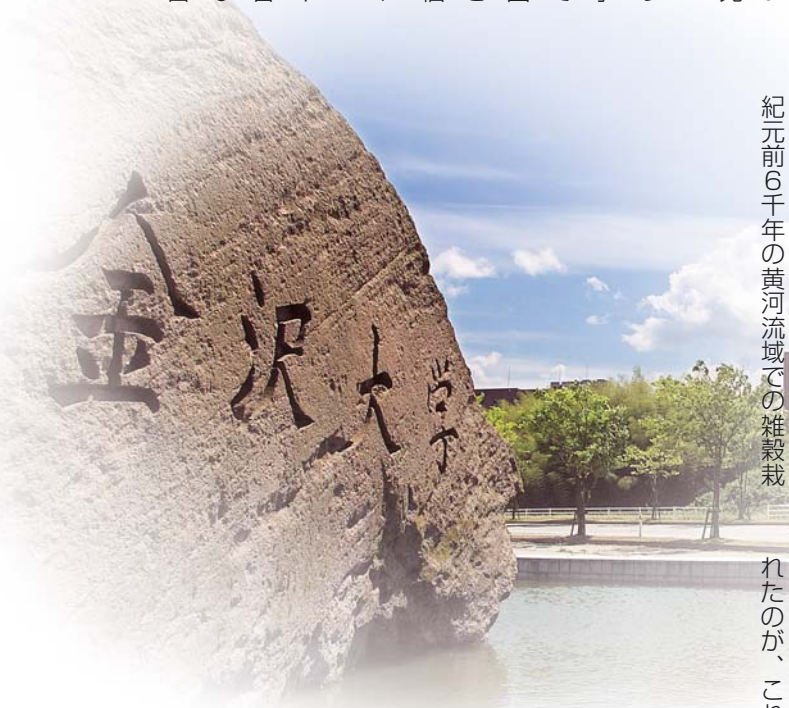
一会はまさに感動的であり、さらには比較考古学が浮かび上がらせてくれる「歴史の向こう側」や「時の流れの魅力」が、学問的な好奇心をそそらずにはおかない。

## フィールド文化学という 学びの新分野を目指して…。

「時の浪漫を扱うという魅力に加え、例えば社会学、経済学、政治学、心理学、宗教学といった、現代では分化している学問分野のすべてを、考古学では扱うこともまた魅力なんですよ」ね。さらに続けて、「蛇足ですが、けっして広く浅くというつもりではなく、広く深くが求められるの言うまでもありません」と笑いながら口にする。

もともと中国考古学が世界に認められるべきだということ。中国なくして人類全体の先史を語るはずもないこと。中国の考古学者たち彼ら自身が中国の凄さにまだまだ気づいていないこと。それらのために自分自身がなさねばならないことをしっかりと見定めていることが、論理的な受け応えから真っ直ぐに伝わってくる。

金沢大学の学部再編、3学域構想も正式に公表されたばかりだが、助教教授らは人間社会学域の人文学類の中に、「フィールド文化学」という新分野の立ち上げを予定している。学部再編が、学びの分野のブレイクスルー、あるいは「ラボレーションを視野に入れていくことを考えると、それらはまさに考古学の学び方そのものの具現化でもあるのだと言えそう。



## 新入生はノートパソコン必携!

Let's  
"e-Learning!!"

# デジタル化する金沢大学

### 全学無線LANアクセスポイント 設置計画図



図書館、総合教育棟、総合メディア基盤センターはすでに設置済み

平成18年度に、金沢大学がデジタル化する。これは「高度情報化社会に対応できる情報処理の基礎能力・総合能力を持った人材育成」をテーマに、学内の様々な場所に無線LANのアクセスポイントを設置、安全かつ利便性の高い情報ネットワークアクセス環境を整備しようというものだ。

### 新入生はノートパソコン必携

それに伴って、平成18年度入学者から全員が「ノートパソコン必携」となる。

誰でも手軽に学内ネットワークやインターネットに接続できる環境。

そこから広がる可能性に、パソコンに詳しい学生はワクワクしているかもしれない。しかし、あまり詳しくない学生や保護者の方々は「?」マークがいっぱいなのではないだろうか。

ノートパソコンは安価ではないし、使いこなすには知識が要る。トラブルだって起きる。

本記事ではそれら、いったいどうなるの?の「?」マークを、「こんなことができるんだ」「この「!」マークに変えてみたいと思う。」

### なぜ、今パソコンなのか

小学生がパソコンを用いてプレゼンテーションする現在、実社会に出る上で、パソコンの操作スキルはも

はや必須といっても過言ではない。

実際、大学のレポートや卒論はパソコンで作成されることがほとんど。就職活動もインターネットが中心で、ホームページ閲覧やメールの受信ができないと、試験どころか説明会にすらたどり着けない。

このような現実に向直面する前に、日常的にパソコンに触れて基礎的な操作を学ぶ。そしてパソコンを使って行われる様々な授業を通して、発展的な活用方法を身につけてもらうというのが、前述の「高度情報化社会に対応できる情報処理の基礎能力・総合能力を持った人材育成」の趣旨である。

### では、具体的に何ができるのか

ノートパソコン片手に大学に通う。すると、学生は学内に整備された無線LANのアクセスポイントを利用することができる。

つまり、いつでも、どこからでも—例えば昼休みに学食から。空き時間に総合教育棟のロビーや図書館から—自由にインターネットにアクセスしたり、メールの送受信を行うことができるのだ。

また、大学のネットワークには、自宅からでもアクセスが可能。これによって、自宅にいながら休講

の確認をしたり、重要な提出物の期限をチェックすることができるようになる。加えて大学側も、学生個人にポータルシステムを介して、あるいは直接のメール送信などで連絡を取ることが可能になるため、より細やかなサポート体制を構築することができるようになる。

### 講義も新しい形に

そして、これら「学内無線LAN環境」及び「大学⇄自宅通信」を有効活用した e-Learning（イーラーニング）と呼ばれる講義もスタートする。

このタイプの講義では、教材や課題提出システム、質問掲示板などがネットワーク上に存在している。学生はいつでも、どこからでもそれにアクセスし、教材を使った予習復習、気になったことの質問、出された課題の提出などができるようになる。つまり、ひとつの講義が教室だけで完結せず、学生の空き時間や自宅にまで広がることになるのだ。

18年度は1年生が中心となるが、以降、少しずつこの形式の講義を増やしてゆく予定となっている。

### 機械は冷たいという誤解

パソコンを用いる学生の生活や講義。

画面に映る文字によるやり取りを想像し、人間的な暖かさの欠如を感じる人も少なくないのかもしれない。しかし、これら「大学のデジタル化」によって、逆に今までもよりも細やかなケアを学生に行うことが可能になる。

なぜならば、これまで人の手で行っていた単純で事務的な業務を、パソコンが高速かつ正確に処理するようになるためだ。

例えば学生の出欠確認。数百人が受ける大教室での講義では、教員は出欠の確認に割いていた多くの時間を、講義をよりよくするために使うことができる。また、その出欠データを使って休みがちな生徒を抽出し、声をかけてみることも今まで以上にやりやすくなる。

集計に時間がかかっていたアンケートなども、パソコンが処理するので容易に行うことができる。例えば今日の講義の理解度をアンケートし、即、次の講義で結果を生かすことも可能だ。

つまり、パソコンを用いることによって、これまで教員から学生への一方的な伝達に陥る恐れがあった大講義

も「学生と一緒に成長してゆく講義」に変えることができると言えるのだ。

### サポート体制も万全

もちろん、パソコンがらみのトラブルに対応してゆく体制も、着々と整備が進んでいる。パソコン相談員の配置や、体育などパソコンを置いてゆく授業のための専用ロッカーの設置、突然の故障に備える貸与パソコンの準備などアフターケアは万全だ。

### おわりに

平成18年度に、キャンパスのデジタル化という新たな進化を遂げようとしている金沢大学。その後も、e-Learning対応授業の増加や、ポータルシステムを2年生以上にも対応させるなど、様々な企画が出番を待っている。

デジタル技術の進歩は早い。その速度に負けないよう、金沢大学も進化を続けてゆく予定だ。

e-Learningと聞いて身構えているのは先生方も同じ。困ったときには「IT教材作成支援室（連絡先(076)264-6079、pi-sien@ai.kanazawa-u.ac.jp）」が全面的にバックアップしてくれるそうですよ！先生も学生と一緒にLet's "e-Learning!!"」



インタビューに応じて下さった総合メディア基盤センターの左/鈴木恒雄 教授 右/松本豊司 助教授

※1 無線LANのアクセスポイント。新1年生だけでなく、2年生以降もノートパソコンを持ち込めば無線LANを利用することが可能。

※2 ポータルシステム。Webclass という学務管理システムを利用し、休講、補講の通知や学生への連絡などができるようになる（18年度は試行段階）。ポータルとは正門や正面玄関の意味で、ネットワークに接続すると最初に表示される画面を指す。

# 自然科学研究科と

# コマツが産学連携協定

共同研究や技術教育、人事交流も

大学院自然科学研究科と世界第2位の建設機械メーカーのコマツが11月9日、産学連携協定を結んだ。本学が企業と総合的な産学連携協定を結ぶのは初めてで、これまで共同研究など個別に協議していたものを、研究だけでなく、技術教育、社会貢献など様々な分野で組織的に協力していくというものだ。

本学側の窓口となっている山崎光悦学長補佐（自然科学研究科教授）に、連携締結の意義を伺った。

## 様々な視点が連携の可能性を広げる

「様々な視点が入ることで、1対1では考えが及ばないような多様な連携が可能となるのが総合的な連携の強み」と山崎教授は言う。

これまでに2回、両者の関係者が集まって「研究テーマ説明会」を行った。



協定締結を終えて手を結ぶ本学及びコマツ関係者



協定書にサインする大村明雄理事(右)とコマツ鈴木常務(左)▶

大学の「教員総覧」から拾った研究テーマ、コマツ側からの希望課題について大学側が何ができるかを説明し、共同研究の可能性を探る。お互いができること、困っているところを出し合ったり、何が協力できるのか話し合う。

これらの話し合いの中から、自動車工場のプレス機械の振動・騒音の抑制技術など、すでにいくつかの研究プロジェクトが動き始めている。1人の研究者では手がけられない課題でも、各分野の専門家がプロジェクトチームを組み知恵を出し合っている。



説明会の後、コマツ関係者が大学の研究室を訪れ実験を見学する、大学の研究者がコマツの工場を見学し相手のニーズを把握するといった緊密な関係も築かれつつある。

## インターシッピングの大口派遣先に

学生の技術教育も連携の大きな役割だ。今年度文部科学省の派遣型高度人材育成協同プランに採択された「分野混成チーム派遣によるモノづくり教育」事業は、自然科学研究科博士前期課程の学生を対象に、異なる分野の学生数名を長期間企業に派遣し、新商品開発のプロセスを経験させるもので、この大口派遣先となるのがコマツだ。生産拠点や規模が大きいので、毎年複数のグループを派遣でき、また、幅広い分野での研究テーマが設定できる。通常は週3回12週の派遣だが、粟津工場や小松工場以外の栃木、大阪、横浜の各工場へは、夏・冬・春の各休みに集中して派遣することも計画されている。

東京の人事部からは、「全面的に協力します」という頼もしい返事もいただいているそうだ。

インターシッピングの経験がその企業への就職につながることもあり、時間をかけて双方が相手を見極めることで、ミスマッチも防げる。就職希望者が多

いというコマツに、学生・企業の双方が納得した形での採用が増加すれば、望ましいことである。

このほか、コマツから自然科学研究科技術経営コース「金沢MOT塾」への講師派遣や、大学からコマツの若手技術者のリカレント教育への講師派遣も計画されており、来年度のMOT塾の授業では、コマツからの講師が、学生に企業の開発経験やビジネスモデルを語る。相互に、自分たちにはない分野の人材を活用することができる。

## 卒業生の力が連携への弾みに

では、なぜ初めての連携相手がコマツだったのだろうか。

コマツは石川県発祥の日本を代表する世界的企業で、歴史もあり、生産拠点を地元に残している。本学が企業と連携を組むのに、「まずコマツを一番に考えるのは当然のこと」と山崎教授。毎年、コマツには5〜6人の卒業生が就職し、関連企業を含めれば工学系だけで100人以上の卒業生が在籍している。協定のコマツ側窓口となっている鈴木康夫常務（7頁中段写真の左から2人目、同下段写真の左）や担当事業部長も本学出身だ。コマツとの連携に至ったのは、卒業生の力が背景にあるようだ。

## 協定を生かすのは相互の努力

今では、コマツの担当者が「こんなことで困っている」と、窓口となる山崎教授に相談すると「誰々を紹介しましょう」とトントンと話が進むこともあるそうだ。「大学に相談したいことがあっても、誰に言ってもよいかかわらない。大学の敷居が高い」という企業側の声に対応できるのが、総合的な連携の強みとなっている。

山崎教授は「連携のメリットを引き出せるように、研究、教育、社会貢献の3つの視点の活動の連携を深めていかなければ、それが現実を結びことにはならない」と意気込みを語る。今後、協定を生かした実効のある連携推進は相互の努力にかかっていると語る。



大学の研究者らがコマツ粟津工場を見学した

高度で先進的な医療を提供する

# 新中央診療棟

医学部  
附属病院長 小泉 晶一

10

月から診療を開始した中央診療棟の充実した設備を紹介します。金沢大学病院の基本理念である、高度で先進的な診療に加え、教育、研究の3本柱がバランスよく調和して発展することを期待しております。

## 日帰り手術も可能に

中央診療棟では手術室が14室に増え、各室の広さも十分でスタッフの評判は上々です。日帰り手術も積極的に採用できるように、大病院にふさわしい高度先進医療を展開し、地域基幹病院としての役割を今後果たしていきます。

新

新たに遠隔操作型ロボット「ダ・ヴィンチ」が導入されましたので、冠動脈バイパス手術の心臓血管系や泌尿生殖器系などの手術で活躍するでしょう。執刀医は内視鏡で患者の体内の三次元映像を見ながら、両手でアームを操作します。見学会では遠隔模擬操作を体験できましたが、素人でも出来そうな簡便性を実感しました。傷口が小さく、患者さんは早期に退院できます。

## 救急部の充実

救急部は1階で、従来に比べ数倍のスペースに拡張され、設備も充実されました。重症の外傷や熱傷、中毒、心肺停止、重度の意識障害など二次救急医療を中心とした展開が期待されます。救命救急センターを目指し、救急医療の指導医、専門医養成施設として研修医の教育に貢献したいと思えます。

最新鋭の医療用設備を配した手術室



前号で、医学部附属病院の新中央診療棟オープンについて紹介したが、充実した新中央診療棟の各診療部門について改めて小泉病院長に説明してもらった。



テレビを見ながら透析治療を受けることが可能に



専用端末により、フィルムレス化を司る操作ホール



一新された血液検査などの自動分析装置

## 検査部門を集中し、院内ネットワーク化

検査 査部関連は3階に集中されました。血液検査などの自動分析装置が一新され、さらに院内ネットワーク化が進むと、生理機能検査などの新項目拡大にも対応できるでしょう。手術部と3階の病理部は専用装置で直結し、手術中における迅速な病理検査がより可能になりました。大病院の検査部として、一般診療のみならず研究と教育の面での役割も重要視されると思います。

レントゲン撮影はフィルムレス化

放射線撮影は2階ですが、レントゲン撮影など画像診断は完全にフィルムレス化されました。すべてコンピュータ画面ですぐに観察できます。画期的なことです。

放

患者さんとのコミュニケーションを大切に

ハ

ードは立派になりました。ただし、診療には、患者さんとわれわれ医療人との心の通ったコミュニケーションがなによりも大切です。新しい施設や機械のみに頼らず、それらを使いこなして、大病院ならではの、より高度で先進的な医療を皆様に提供していきたいと思っています。新しくなりました金沢大学病院を今後ともどうぞご利用いただければ幸いです。



救急救命センター構想実現に向け、大幅に充実した救急処置室

# 「医師不足の能登地区を支援する」

## 「地域医療学講座」

地域医療学講座  
客員教授

石川 紀彦

### 地域病院の医師不足が深刻化している

従来は、「大学医学部医局制度」により研修医を含む医局員をその関連病院に医師として派遣することで、地域医療および若手医師の教育を実施してきました。

しかしながら、近年様々な理由から、医局が医師を全ての地域病院に充分派遣できなくなってきたのが現状です。

### 危機的状況を研究し、解決する

この様な医師不足は石川県では能登北部地区で特に深刻になっており、県内の医師充足率は県全体で25.5%であるのに対して、能登北部地区は81.5%と著しく低いことが分かります。もちろん、当該地域における自治体病院は各種の診療科を持っています。そのため診療科によっては必要な医師の数を確保できず、適切な医療を提供できないおそれがあります。

このような危機的状況を研究し解決すべく石川県の寄附により地域医療学講座が金沢大学大学院医学系研究科に設置されました。

### 活動その① 現状の把握

#### 様々なデータを詳細に

本講座の活動目標は大きく分けて3つあります。

まず一つ目は能登北部で医療過疎が問題となっている4自治体病院（珠洲市総合病院、公立宇出津総合病院、市立輪島病院、公立穴水総合病院）の現状の把握（たとえば外来患者の人数と疾患、手術件数、救急患者の数やそれに対応する医師の数、設備の充実具合など）を行い、不足している内容の詳細な検討をおこない役割分担などの解決策を探ることです。

### 活動その②

#### 遠隔医療システムの構築 手術ロボットも活躍

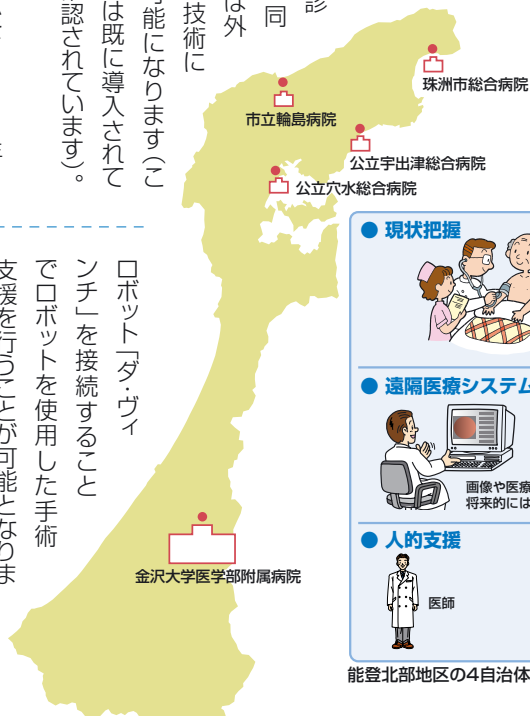
二つ目は、遠隔地域での専門医不足の解消、医師教育の充足を目的として、IT技術・ネットワークを利用した遠隔医療システムの開発および構築を行うことです。

このシステムにより、遠隔地において専門的な診察が必要な患者にも都市部と同様に専門外来の受診が可能になります。同時に、医師に対しては外科手術や検査などの技術に関する遠隔支援が可能になります（この遠隔医療は欧米では既に導入されています）、その有用性が確認されています。



平成17年12月に実施された、ロボットを使った手術の第1例  
離れた場所にある操作盤からロボットの腕先を操作して手術する

さらにこのシステムを2005年9月に金沢大学に既に導入された手術用



### ● 現状把握



### ● 遠隔医療システム構築



画像や医療情報を転送  
将来的には遠隔手術も。

### ● 人的支援



能登北部地区の4自治体病院を支援

### 活動その③ 人的支援

#### 地域医療の発展に寄与する

3つ目の活動として、現在も医師不足に直面している能登北部4病院に対して人的支援を行っております。

県内における医療過疎の解決策として、医師派遣バンクなどが設立されています。本講座では各病院の状況を研究し、対策を講じるのみならず、上述したような、遠隔診療システムの開発構築をはかり、地域医療の発展に寄与していきたいと思っております。

2005年8月から2006年の7月までの1年間、大学間交流協定校であるヘルシンキ工科大学に留学している大学院生からの報告です。彼女は博士後期課程の学生で、留学先では個室の研究室とPCを使うことができ、恵まれた環境で、勉強と研究に充実した留学生活を送っているそうです。

自然科学研究科博士後期課程2年  
湯田 ミノリ

フィンランド人気質

ヘルシンキ工科大学は、ヨーロッパ屈指の理工系大学です。大学自らが最高レベルと自負するだけあって、学生、授業、環境など全てにおいて大変質が高い学校です。

大学の授業期間中は本当に課題、試験に追われる日々です。どの授業も課題が驚くほどたくさん出されるのですが、一人で



建築家Alvar Aaltoの設計によるヘルシンキ工科大学メインビルディング



Sitsitは、歌と乾杯と食事忙しいフィンランドの大学生特有のパーティー

解を補完しながら、専門的な知識や技術を身に付けるだけでなく、他の人の持つ異なった意見をどのようにまとめていくかも学んでいきます。彼らは自分の意見を持っており、それを理論的に展開し、かつ的確に表現できる技術が身につけているため、一緒にいて学ぶところがとても多いです。

もちろん勉強は大変ですが、そればかりというわけではなく、週末になるとパーティーや旅行などがあちこちで行われ、みんなそれぞれ大学生生活を楽しんでいるようです。

パーティーといえば、フィンランドの大学生の行う代表的なものに「Sittsitt」があります。これはみんなで歌をうたい、一曲終わったら乾杯し、食事を食べ、また合図があれば食事をやめて歌をうたい…を繰り返すというものです。パーティーにはそれぞれテーマがあり、ドレスコードが指定されているので、当日はそれに合わせた格好をしていきます。大人しいと思われがちなフィンランド人の「本当はおしゃべりでも歌とお酒が大好き」という面が見られても楽しいです。

やるというよりは、グループでプロジェクトを行う機会がとても多いのです。他の学生とともに課題をこなすことを通じて、互いに理

Dou!Sou!Kai! 便り

薬学教育制度の激変に直面する  
母校を支援する金沢大学薬学同窓会

大学院自然科学研究科・研究科長 教授、  
薬学同窓会常任理事

辻 彰



薬学部生が学ぶ角間キャンパス自然科学研究科棟

「金沢大学薬学同窓会」の起源は、1912（大正元）年に金沢医科大学附属薬学専門部卒業生の同窓会組織「十全会」から独立して発足した「葦学同窓会」である。新制大学制度のもと「金葉同窓会」に改組後、1957（昭和32）年に発

母校の在校生、教職員に対する支援を強化するため、2002（平成14）年から、薬学部長が会長を務める形式を止め、会員の中から会長を選出し、薬学部長が会長に選出されない場合は副会長として会長を補佐し、会の活動・発展に協力する体制とした。名称も「金沢大学葦学同窓会」と改め、会長に大橋力氏（昭和20年卒）を選出した。

生じた薬学部の火災から復旧の見通しが立ち始めた頃に、同窓会改組計画が教授会で発議された。検討を重ねた結果、薬学部長が会長を務め、教職員、学生を会員に加えて、卒業生との親睦を図る「薬友会」が1964（昭和39）年に発足した。

この改革により、本部事務局を薬学部に置き、学生が入学時に終身会費を納入することにになり、財政的にも安定した同窓会組織となった。

本会は、関東、東海、関西、石川など14の支部と4500名の会員を擁し、在校生の課外活動と薬剤師国家試験の経済的支援のほか、年1回の金沢での総会において、新任教授の最先端研究についての講演会と懇親会を開催している。また、学部・大学院関係の現状と将来計画や会員の消息を知らせる「薬友会誌」を毎年発行するほか、会員名簿の管理、支部との連絡などの事務業務を行っている。

薬学部は、一昨年4月に宝町キャンパスから角間キャンパスに移転し、平成18年度から薬学部は6年制と4年制を併設して新しい未来を築く。この



金沢大学薬学部の教育研究制度の激変に対し、同窓会は支援体制を整えている。

# 石川県専門学校

（専門教育の始まり）

資料館客員研究員 板垣 英治

## 英才優秀の士を養成

**石** 川県中教師範学校は、明治14年7月に当初の中学校

教員養成という開校目的を改めて「英才優秀の士を養成すること」として、石川県専門学校に改制されました。本校は「専門教育を目的」とした公立学校として、全国的に見ても異色な存在でした。校舎は前回に記した中教師範学校のを引き継ぎ、仙石町通37番地にありました。本校に関しては明治21年8月の石川県から国への敷地・資産移管書類（公文書）に詳しく書かれています（写真1）。

敷地千坪（3300㎡）に全校建物十棟（建坪533坪、約1763㎡）の木造棟がありました。明治14年の教員は14名であり、教諭は2名（法学士1名、理学士1名）です。さらに明治20年では、校長武部直松、教諭本間六郎（文学士）、今井省三（理学士、化学、



写真2：石川県専門学校附属初等中学校の生徒たち（明治19年9月撮影）  
後列左端／鈴木貞太郎、中列左端／井上友一、前列右端／藤岡作太郎  
金沢市立ふるさと偉人館蔵（井上友一の令孫 井上靖子氏旧蔵）



写真1：「旧石川県専門学校敷地並資産引継書類及目録 第四高等中学校」

北条時敬（理学士、数学）の3名、外人英語教師1名と助教諭および助手16名であり、教員構成の特徴は平均年齢23・7才と若輩で占められて、当時の専門教育のための人材難を映し出しています。

## 第四高等中学校へ

一方、この環境は生徒にとつては「家族的雰囲気」があったと好評な面もありました。本校は予備科3年と理・文・法科からなる本科3年の6年制を採用し、初等中学校の履修者を試験の上で入学の許可をしていました。生徒総数は明治14年に77名、15年には137名、18年には238名と増加しています。明治19年4月に文部省より公布された「中学校令」により、全国を5区に分けて各地に1校の高等中学校を設置することになり、同年11月に設置区域の発表と、翌年4月の「第四区内金沢二高等中学校ヲ設置」とされたことを受けて、本校の管理は石川県から文部省に移管されました。これが第四高等中学校の始まりです。専門学校の教育成果が高등학교の誘致に大きく寄与したのです。

本校は明治21年3月に閉校さ

れました。本校には、井上友一（法学、東京府知事）、木村栄三（文学）、西田幾多郎（哲学）、鈴木貞太郎（大拙、仏教学）、藤岡作太郎（日本文学）等が同級生として名を連ねていました（写真2）。これは郷土の誇りとすべきことです。この他多くの卒業生が大学に進学して、その後社会で活躍しています。

本校の教育は当時専門教育のための和書や翻訳書が十分ではなく英語での講義であり、教科書を学校で購入して、生徒には有料で貸し出していました。本校には和書（137種、1289冊）および洋書（459種、1488冊）が架蔵されていましたが、これらの洋書の内418種、575冊が現在も金沢大学附属図書館や金沢泉丘高等学校図書館等に架蔵されています（写真3）。また物理学教育のための実験機器の多くが残され、当時の最新の教育の様子を偲ぶことができます。



写真3：石川県専門学校蔵書印（金沢大学附属図書館に架蔵されている図書に押印されている）

●このほか、金沢大学のニュース&トピックスは、金沢大学公式ホームページでご覧いただけます。  
http://www.kanazawa-u.ac.jp/

## ●9月期学位記・修了証書授与式

9月30日、平成17年度9月期金沢大学学位記・修了証書授与式が行われ、学部生、大学院研究科修士、博士論文審査合格者の96名に学位記が授与された。



## ●林学長、日本学術会議第20期会員に

10月3日から5日まで開催された本年度の日本学術会議総会で、林勇二郎学長が第20期の会員に選出された。従来の学協会推薦制から、独自の選考委員会が業績を基に選考する制度に改革後初となる第20期日本学術会議は、林学長ら178名の新会員を含め、210名の会員でスタートした。

「科学者の国会」とされる学術会議には、林学長を含め国立大学長の5名が、また北陸信越地区からは林学長のみが選出された。

## ●金沢大学立教大学金沢シンポジウム

本学と立教大学が共催する金沢シンポジウム「21世紀、地域と大学—大学の新しい魅力」が10月16日、金沢市内のホテルで開催された。シンポジウムでは、(株)電通常務杉山恒太郎氏、金沢美大学長平野拓夫氏の講演のほか、本学林学長、立教大押見輝男総長及び加賀屋会長小田禎彦氏の鼎談があり、大学の地域貢献のあり方について考えた。



## ●公務員試験対策講座受講生の合格者180人に

本学と生活共同組合が共催で開講している公務員試験対策講座の第Ⅲ期生(平成16年度受講)の合格者が180人となった。同講座の第Ⅰ期からの受講生は、205人、231人、262人と1.3倍の増加であるが、受講生のうち合格者は96人、128人、180人と1.9倍の伸びを見せ、着実に講座の効果が現れている。(合格者には重複合格者が含まれる)

## ●第42回全大祭「風に向かって立て」

11月3日から11月6日にかけて、「風に向かって立て」を統一テーマに第42回全大祭が角間キャンパスで開かれ、約6000名の市民が来場した。金大祭本部企画の講演会は11月5日に開催され、アジアプレス・インタナショナル代表である野中章弘氏が「戦場の真実を追って」と題し、約100名の市民らに語った。



## ●理学部「ふれてサイエンス」、工学部「てくてくテクノロジー」に多くの市民ら参加



「ふれてサイエンス」使い捨てない懐炉

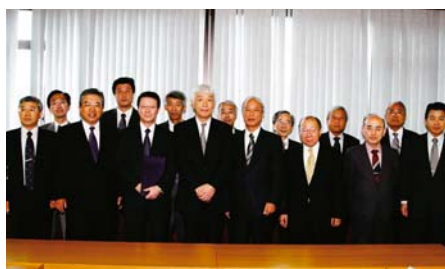
11月3日、第42回全大祭の開催に合わせ、理学部「ふれてサイエンス」、工学部「てくてくテクノロジー」が同時開催された。それぞれ学部の教育研究内容を小・中・高校生、地域住民に紹介して興味を持ってもらうよう、と開催しているもので、「ふれて」は13回目、「てくてく」は6回目。悪天候にもかかわらず、延べ約26000名の参加者があった。



「てくてくテクノロジー」ペットロボット

## ●コマツと産学連携協定を締結

本学は11月9日、建設機械メーカーのコマツと産学連携の推進に関する協定を締結した。



協定書を交した本学及びコマツ関係者

自然科学研究科と同社は、今後この協定を通じて共同研究等研究開発、技術教育とそれにかかる人事交流を進める。本学が企業と産学連携協定を結ぶのは、今回が初めて。

共同研究では、産業機械製造や自動車用プレス製造時の騒音、振動を抑える技術の研究など、また、本学からの学生のインターンシップ派遣、コマツからの非常勤講師の受入れ、同社の若手技術者のリカレント教育への講師派遣など人事交流が計画されている。(7～8面に関連記事)

## ●平成17年度司法試験に、昨年度に続いて6人合格

11月9日、法務省から平成17年度司法試験第二次試験(最終)の合格者1464人(昨年度1483人)が発表され、本学からは昨年度合格者と同数の6人が合格した。本学の累計合格者は169人、今年度の大学別の合格者の数では、全国29番目、国立大学では12番目となった。

# Calendar

9

30 9月期学位記・修了証書授与式

10

3~5 林学長、日本学術会議第20期会員に

4 学生による学内ミニ放送「WEB-KURS(ウェブクラス)」が開局

6~9 林学長ロシア出張(ロシア科学アカデミー極東支部と協定更新、ロシアー日本シンポジウム出席)

13~14 北陸技術交流テクノフェア2005に出展

16 金沢大学立教大学 金沢シンポジウム

// 地域経済塾「奥能登流コミュニティビジネス講座」開講

17 韓国地質資源研究院と大学間交流協定

26~28 中部ものづくり産業展2005:産学官連携ビジネスショー2005(名古屋)に出展

28 法情報センター北陸 講演会「司法制度の改革」

// 地域経済塾「金沢ビジネスアカデミー」開講

// 事務OB会

29 ミニ講演「白山は噴火するのか?」

30 公務員試験対策講座受講生の合格者180人に

31~11/11 資料館特別展「科学技術史研究の卵たち」

11

2 VBLビジネストライアル発表会

3~6 第42回金大祭

3 理学部「ふれてサイエンス」

// 工学部「てくてくテクノロジー」

// 重点研究公開講演会

5~6 金沢学「秋コース」

ミニ講演「金沢の橋から何が発信できるか?」

3~12/10 北陸4大学連携 まちなかセミナー

5 地域経済塾「北陸地域経済学講座」開講

9 コマツと産学連携協定を締結

// 平成17年度司法試験に、昨年度に続いて6人合格

14 小松市、日本政策投資銀行と産学官連携協定

22 自然科学系図書館開館記念シンポジウム

25 21世紀COEプログラム・知的クラスター創成事業連携シンポジウム「脳の発達と老化」

// 分子標的薬剤開発センター公開シンポジウム

// 就職支援団体「SIN」が初イベントを開催

26 教育フォーラム2005

12

3~4 第2回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム

5 馳 浩文部科学副大臣が附属病院を視察

8 金沢大学留学生懇談会

9 2008年度実施予定の「3学域構想」について発表

// 金沢大学・金沢美術工芸大学合同シンポジウム

12 金沢大・北陸先端大、第5回研究交流会

15 第6回バイオ・サイエンスシンポジウム

16~17 金沢学「冬コース」

17 朝日・大学パートナーズシンポジウム

24 ミニ講演「なぜ人は身体運動が必要か?」

## 各種受賞等

10/15 北信越学生ハンドボール選手権男子優勝

23 人事課世古真知子さん おかやま国体ライフル射撃競技で第2位

30 北陸学生アメリカンフットボール秋季リーグ戦優勝

11/3 秋の叙勲 瑞宝中級章

(松原藤継名誉教授、田中久一郎名誉教授)、瑞宝単光章(田村肇子看護師長)

// 金沢市文化賞 馬淵宏名誉教授

// 北國文化賞 自然科学研究科安藤敏夫教授

13 第12回森田杯北信越学生ソフトテニスチーム対抗戦 男女優勝

12/17 アメフト部加藤公基選手、NFLヨーロッパに特別強化選手に選ばれる

## ●小松市、日本政策投資銀行と産学官連携協定を締結

共同研究センターは、小松市のもので、力の強化、産業集積向上を図るため11月14日、小松市及び日本政策投資銀行と産学官連携協定を締結した。地域のもので、力の強化を目的に、大学、自治体、金融機関との間で協定を締結するのは、わが国初。

協定締結により、本学では同市企業との共同研究の推進、産学官連携地域モデルの構築を、同市はものづくりの活性化、同行は同市のもので、ものづくり企業のサポートなどを推進する。



左から本学村上清史共同研究センター長、西村徹小松市長、三合康人日本政策投資銀行北陸支店長

## ●第2回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム

12月3、4日の2日間にわたって本学を会場に「第2回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム」が開かれた。各地域の大学コンソーシアム及び大学連携組織の連携を通して情報交流・研究交流を図ることを目的に、全国大学コンソーシアム協議会が昨年度から開催している。今回は「大学連携からはじめる地域の活性化」をテーマに、基調講演、パネルディスカッション、分科会が行われ、国公私立の大学、短大、高専の教職員等300名余りが参加した。



「大学コンソーシアムの可能性～地域との協働の観点から～」をテーマに行われた「パネルディスカッション」

## ●2008年度実施予定の「3学域構想」について発表

本学は12月9日、現在8学部ある学部を、人間社会、理工、医薬保健の3学域に再編・統合する3学域構想について記者発表した。この再編は2008年度から実施予定で、発表は2008年度入学生を対象とする入試の概要を2年前に予告するために行ったもの。発表では、林学長、大村明雄・鹿野勝彦両理事から、改革の概要や教育課程の編成について説明を行った。(1~2面に関連記事)



## ●朝日・大学パートナーズシンポジウム

本学角間キャンパスと龍谷大学深草キャンパスをテレビ会議システムで結ぶシンポジウムが12月17日に開催され、両大合わせて430人が参加した。テーマは「人をつなぐ、未来をひらく。大学の森一里山を「いま」に生かす」。朝日新聞社が大学とパートナーを組んで開催しているシンポジウムの一環。

両大はそれぞれキャンパス内に里山を持ち、学生らの研究だけでなく、市民との交流の場としても活用している。シンポジウムでは、霊長類学者の河合雅雄京都大名誉教授の基調講演や両会場をテレビ会議システムで結んで討論するパネルディスカッションがあった。



金沢大と龍谷大をテレビ会議で結んだ

**金沢大学 3学域構想**  
2008年度実施予定

学問って、  
身近なモノを  
見つめ直すだけで  
始められるんだ。



<http://www.kanazawa-u.ac.jp/gakuiki/index.html>

金沢大学は2005年12月9日、3学域構想を発表しました。

詳しくは本誌の1、2ページ及び上記URLをご参照ください。

**生協食堂で ミニ放送実施中!**

毎週火曜・木曜 12:20~12:35 皆さんに大学の情報を伝えます。



情報提供

学生情報

・サークル情報・就職情報・学生情報  
学生支援課

社会貢献情報

・角間の里山自然学校・金沢学  
開放センター&サテライトプラザ  
・地域経済情報センター・市民大学院&観光学

生協情報

・生協食堂情報・生協購買情報  
一言カード

~放送番組内容~

学生ニュース

社会貢献ニュース

生協ニュース

**学生によるミニ放送in食堂** 番組名:「Web-KURS (ウェブクラス)」

Web-KURS (金沢大学放送局)はWeb:インターネット,  
K:Kanazawa(金沢)・U:university(大学)・R:radio(ラジオ)・S:station(局)  
の意味で付けられました。



**番組スタッフ募集!!**

《募集内容》

- 対象 本学学部生、大学院生
- 職務内容
  - 1.番組企画編成スタッフ
  - 2.技術スタッフ
  - 3.アナウンサー

1・2年生  
大歓迎!!

●お問い合わせ

金沢大学社会貢献室 担当: 稲置 (いなおき)

TEL.076-264-5290 FAX.076-234-4052

**リクエスト受付中!** 採用された方には素敵なプレゼントも♪

リクエスト専用掲示板 <http://8001.teacup.com/webkurs/bbs>



●Acanthusとは?

「アカンサス」は、古代ギリシア・ローマに由来し、金沢大学の校章に使われている植物の名称(和名ハアザミ)で、角間キャンパスの各地区をつなぐ連絡橋の名称に使われるなど、学生・教職員に親しまれている。

●記事訂正 2005年10月発行の「Acanthus No.3」6頁の上1段1行目及び上2段11行目で、「北陸学院大学」と記載しましたが、「金沢学院大学」の誤りでした。お詫びして訂正します。

ご意見・ご要望

金沢大学では、より良い広報誌を作成するため、みなさまからのご意見・ご要望をお待ちしております。取り上げてほしい話題、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒920-1192 金沢市角間町  
TEL.(076) 264-5024 FAX.(076) 234-4015  
金沢大学広報室 宛  
E-mail:koho@ad.kanazawa-u.ac.jp  
HP <http://www.kanazawa-u.ac.jp/>

今冬は20年ぶりの豪雪に見舞われ、角間キャンパスにも12月初旬から降り積もった雪が、本号表紙のように根雪となつて固まっている。しかし、雨や雪にぬれずに各建物間を移動できるように、渡り廊下や地下連絡通路が整備されているので、キャンパス内は靴で移動可能である。今年とりわけこの設備が有難い。

本号で紹介されているように、本号では来年度から無線LANを中心とした学習システムが整備される。学生が学びやすい環境を整備するのも大学の使命だ。表紙のように、学生の笑顔があふれる大学でありたいものだ。(R)



編集後記